ゲリラ戦争

武装闘争の戦術

エルネスト・チェ・ゲバラ　五十間忠行訳

この著作は、たんにキューバ革命の総括を意図したというものではない。また、経験主義的なゲリラの〝歩兵操典〟の性格のみをみるのも皮相な読み方である。ゲバラの意図はそうしたものをはるかにこえ、キューバ革命の経験にもとづいて、ラテン・アメリカ全体にわたる革命の一般理論を提示することであった。さらにいえば、共産党をふくむラテン・アメリカの革命家の隊列にひそむ伝統的な〝敗北主義的態度〟を批判し、米州大陸における革命の主要な戦略としてゲリラによる武装闘争を対置し、その勝利への展望を描き出すことであった。

一見瑣末とも思われるこまごましたゲリラ生活への指示は、大陸の歴史上キ

（カバー裏へつづく）

ゲリラ戦争

エルネスト・チェ・ゲバラ
五十間忠行訳

三一書房

ゲリラ戦争／目次

カミロに捧ぐ　7

第一章　ゲリラ戦の一般原則　13

一　ゲリラ戦の本質　13

二　ゲリラの戦略　23

三　ゲリラの戦術　28

四　有利な地帯での戦闘　37

五　不利な地域での戦闘　43

六　都市周辺での戦闘　50

第二章　ゲリラ部隊　55

一　社会変革者としてのゲリラ戦士　55

二　戦闘員としてのゲリラ戦士　59

三　ゲリラ隊の組織　74

四　戦闘　85

五　ゲリラ戦の開始、発展、終結　99

第三章　ゲリラ戦線の組織　103

一　補給　103

二　民政組織　110

三　女性の役割　117

四　医療問題　121
五　サボタージュ（破壊活動）　127
六　軍需産業　131
七　宣伝　134
八　諜報　138
九　訓練と教育　144
一〇　革命軍の組織的構造　144

第四章　補遺　149

一　最初のゲリラの秘密組織　149
二　獲得した権力の防衛　155

エピローグ――キューバ情勢の分析、その現在と将来　159
キューバ革命――例外か、反植民地主義闘争の前衛か？　183
解説　チェ・ゲバラとゲリラ戦略の発展　207
一　ゲバラの著作『ゲリラ戦争』の目的と性格　207
二　ゲバラその人とゲリラ戦略の成立　209
三　今日におけるゲバラ理論の若干の問題　213

カミロに捧ぐ

私は、カミロ・シェンフェゴスにこの書物をみてもらうつもりであった。かれに原稿を読んでもらい、叱正をあおぐつもりだった。しかし、運命はそれを不可能にしてしまった。[1] 私は、ここに革命軍の名において、キューバ革命が生んだ最大のゲリラ指導者、完全な革命家で、真実の友であった偉大な革命軍の指揮者に敬意を表したい。

カミロは、われわれとともに数多くの戦闘に参加し、たたかいの困難な時期に、フィデル（カストロ）の近しい相談相手となった。厳格な戦士であったかれは、犠牲というものを、自己の性格とゲリラ部隊の士気をきたえるための道具と考えていた。かれが生きていたら、われわれのゲリラ戦の経験を綜合したこの手引書を承認してくれたにちがいないと私は思う。なぜなら、この書物は、生活そのものの所産なのであるから。そして、まれな歴史的人物だけが完全にそなえている生き生きとした内面的情熱、知性、豪胆さをこの書物に吹きこんでくれたであろう。

しかし、カミロを、自己の個人的天才の衝動によってのみ、すばらしい偉業をなしとげた孤立した英雄と考えてはならない。かれは本当に、かれを育てた人民の一部分であった。人民は、つねに、きびしい闘争の過程で、自分たちの英雄や、殉教者や、指導者たちをえらび出し、育ててきたのである。

私は、カミロが、革命運動についてのダントンのことば――「勇気、勇気、もひとつ勇気」ということばを、聞いたことがあったかどうかは知らない。しかし、かれは、行動のなかでこのことばを実践したばかりでなく、ゲリラ戦士に要求される他の資質をこれにつけくわえたのである。それは、情勢をすばやく、正確に分析し、将来決着のつく問題を先取りして判断しておく能力である。

われわれの英雄にたいする私と、全人民の敬意を表明するためにこの文章を書いているのだが、私はこのなかでかれの伝記やかれにまつわる逸話を語るつもりはない。

しかし、かれに関する逸話は数えきれぬほど多い。かれのゆくところ、自然に逸話が生まれた。かれの気のおけない態度は、いつも人びとから敬愛された。カミロの関係したことには、すべて、自然に、ほとんど無意識のうちにかれの人がらがうつし出されていた。すべての行動に、かれほどハッキリ自分の個性をあらわすことのできたものはいない。フィデルがかつていったように、かれは書物から教養を得た人ではなかった。かれは、天性の、人民の知恵をもっ

ていた。そして人民が、かれの大胆さ、ねばり強さ、知性、たぐいない献身を認めて、かれを数千人のなかからえらび出し、高い地位につけたのである。

カミロは、宗教的なほど深い忠誠心をもっていた。かれは、人民の意思をだれよりもよく体現していたフィデルにたいして忠誠であるとともに、人民そのものにたいしても忠誠であった。人民とフィデルは一体となって進んだ。無敵のゲリラ隊員たちも、同じように、一丸となって献身したのであった。

だれがカミロを殺したのか？

いや、われわれはむしろ、「だれがカミロの肉体をほろぼしたのか？」と問うた方がよいだろう。なぜなら、カミロのような人は、人民とともに生き続けるからだ。このような人びとの生命は、人民がその死を望まないかぎり終ることはないのである。

敵はカミロを殺すのに成功した。なぜなら、絶対安全な飛行機というものは存在しないし、あらゆる経験をもったパイロットというものも存在しないからだ。そして、カミロが仕事を背負いこみ過ぎて、大急ぎでハバナに着こうとしたからだ。カミロを殺したのは、かれ自身の性格であった、ということもできる。かれは危険を意に介しなかった。かれは危険を楽しみにし、それをあざけり、なぶり、それとたわむれるような人だった。ゲリラ戦士として、かれには、雲がでているからといって計画を延期するようなことは考えられなかったのである。

キューバの全人民がカミロを知り、愛し、たたえるようになったあとで、かれは死んだ。かれがもっと早く死ぬこともあり得ただろうし、もしそうだったとしたら、かれの歴史は、平凡なゲリラ隊長のそれに過ぎなかったであろう。

「たくさんのカミロのような人物が出てくるだろう」とフィデルはいった。私はつづけていたい。「カミロのような人たちが、なん人もいたのだ。カミロを歴史的人物にしたような、すばらしい行動の軌跡をたどるまえに死んでいった多くのカミロたちがいたのだ」と。カミロと、その他のカミロたち（勝利まで生きのびることのできなかった、またこんごあらわれてくるであろう）は、人民の力を示すものである。かれらこそ、国民がそのもっとも気高い目的の達成できることを信じ、そのもっとも純粋な理想を守るためのたたかいに立ち上ったときに生み出される力の、最高の表現である。

カミロという人物に等級をつけ、かれを型にはめることはやめにしよう。それでは、かれは死んでしまう。かれの大まかな輪郭をのべるにとどめ、かれが、厳密な社会経済的イデオロギーの持ち主だったなどということはしないでおこう。かれは、そんなものを完全に定義づけたりしたことは全然なかった。われわれはそれよりも、カミロが、この解放戦争のなかで、比類のない兵士であったことを強調したいのだ。完全な革命家、人民のものだった人間、キューバ国民が、みずからつくり出した革命の生んだ子であった。倦怠や落胆の影が、かれの頭をかす

めたことは一度もなかった。

ゲリラ戦士カミロは、「カミロがやった」といわれるあれこれの仕事によって、キューバ革命にハッキリとした消えることのない足跡をのこした。それは日毎、永久にわれわれを鼓舞しつづけるだろう。かれは、勝利の日まで生きながらえなかった人びと、またこんごあらわれてくるであろう人びとともにある。

永久に、ほろびることなく再生するカミロ、かれこそは人民の記念碑である。

注1　カミロ・シェンフェゴスは、一九五九年一〇月二八日、カマグエイからハバナに向け、海上を飛行したさい死亡した。

第一章　ゲリラ戦の一般原則

一　ゲリラ戦の本質

バチスタ独裁にたいする武装せるキューバ人民の勝利は、世界の新聞に報ぜられたような英雄主義の凱歌にとどまるものではない。それは、ラテン・アメリカの人民大衆の行動にかんする古くさいドグマをもくつがえした。それは、人民を抑圧する政府に抗して、ゲリラ戦によってみずからを解放する人民の能力を明白に示したのである。

われわれは、米州における革命運動にたいして、キューバ革命がつぎの三つの基本的教訓をあたえたと考える。すなわち、

(1)　人民軍は、正規軍とたたかって勝てるということ。

以下

制作中

ゲリラ戦争

1967年9月10日　第1刷発行
1972年4月15日　第6刷発行

訳　者　© 五十間　忠行
1967年

発行者　田川敬吾
印刷所　株式会社 三陽社
製本所　本間製本株式会社
発行所　株式会社 三一書房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電話 東京(291)3131～5番
振替 東京 84160番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　三一新書 585

0231-670585-2726